豊かな感性を育む音楽科の指導

全学年合同「リズムにのって」

1　音楽科における学習ステップと活動の見通しについて

本学級では，音楽表現における学習ステップと活動の見通しを次のように捉えている。

学習ステップ	活動の見通し
・音楽がなっていることや，楽器以外のことに意識がむいている。 ・音楽がなっている方や，楽器のあることに気づく。	・指導者のことばかけや，身体的な援助があればわかる。
・音楽のなっている方や，楽器の方を意識する。	・好きな音色がなるとわかる。
・音楽に関心を示し，音楽のなっている方や楽器のある方に動こうとする。好きな活動や音がはっきりとしてくる。	・楽器を操作すると音がなることがわかる。操作の仕方がわかる。
・短発的に音楽によって身体を動かしたり，楽器の音や声を出す。 ・持続して音楽によって身体を動かしたり，楽器の音や声を出す。	・音楽のリズムやメロディーの好きな部分が出てくるとわかる。 ・音楽の速さがわかる。
・音楽の流れに合わせて身体を動かしたり声を出したりする。楽器の音が分かり音を出す。楽器の音の違いがはっきりわかる。 ・指導者や友だちの動きを作ったり，楽器で表現する。 ・指導者や友だちの表現と合わせた表現をする合奏や分担奏をする。	・音楽の流れの中で表現していくことがわかる。 ・音楽の構成がわかる。 ・指導者や友たちの表現を見て，活動の仕方がわかる。 ・自分で工夫して表現していこうとする。

このように児童の見通しを捉えた上で，児童の表現する力をより豊かなものにしていくためには，教師の支援は次の点を踏まえたものであることが必要であると考えられる。

① 児童の気づきを促す教材・教具である。(多様な楽器や音楽活動を準備する。)

② 音楽が児童の活動に合わせていくことのできるものである。

③ 模倣して活動できる場を設定する。

④ 相互に聞きあったり，かかわりながら表現する場を設定する。

2　指導事例ー「リズムにのって」

(1)　題材について

本学級では，1年生から6年生までの18名を学習集団として音楽の授業を

行っている。音楽活動への児童の関心は高く、特に楽器を使用した活動を好んでいる。児童一人ひとりはこれまでの楽器を使用した活動を通して，それぞれ好きな楽器がはっきりとしてきている。児童の活動への意欲を高め，表現する力を育てていくためには，個々の児童が自分の思いをこめて表現できる場を設定していくことが必要であると思われる。そこで，本題材では，教材曲「みんないっしょに」[注1)]（C．ロビンス作詞・木村訳詞，P．ノードフ作曲）を選択し，たいこ，シンバル，リードホーン，トーンチャイム，タンブリンを演奏する活動を行っていくものである。教材曲「みんないっしょに」は，使用する楽器が歌の中に順番に出てくる曲である。歌で楽器を演奏する順番が分かることから分担奏や合奏の構成が児童に分かりやすくなっている。また，一人ひとりの児童の演奏する速さや音を出すタイミングに合わせて音楽が展開できるようになっている。

(2)　**児童の実態**

本題材の内容に関する児童の実態は次のようである。

	児　童	実　　態	課　　題
音楽的表現	①②③	音楽の流れに大まかにあった表現ができる。	自分の好きな楽器を選んで拍の流れにのって表現するようになる。
	④⑨⑪⑭⑮	音楽の速さに合った表現ができる。	音楽のリズムを感じて表現するようになる。
	⑤⑥⑦	音楽の拍の流れにのって安定したリズムで表現できる。	友だちと一緒に分担して楽器で表現するようになる。
	⑧⑩⑫⑬⑯⑰⑱	友だちの出したいろいろな楽器の音が聴いて分かる。	友だちの音を聴きながら分担奏するようになる。
集団	①②③⑭⑮	指導者の言葉かけや援助によって活動できる。	指導者のよびかけで一人で活動するようになる。
	④⑤⑥⑦⑩⑪⑫	指導者や友だちの模倣をして活動できる。	友だちとかかわりながら活動するようになる。
	⑧⑨⑬⑯⑰⑱	友だちとかかわりながら活動できる。	友だちに働きかけながら活動するようになる。

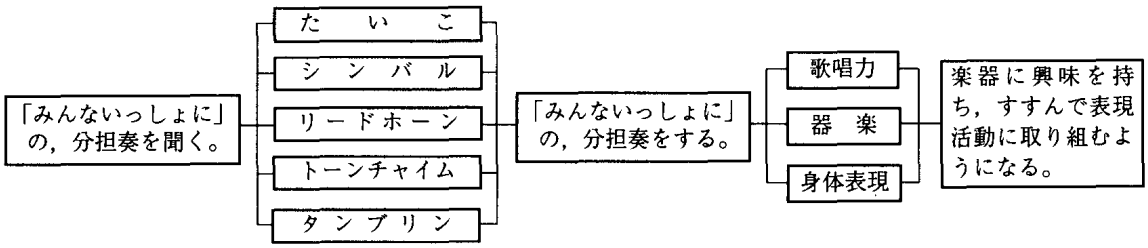
(3) 指導目標

① 楽しんで音楽活動に参加する意欲を育てる。

② 音楽の流れを感じとっていろいろな楽器で表現できるようにする。

③ 友だちと一緒に表現する楽しさを味わうことができるようにする。

(4) 指導内容と計画



(5) 指導の実態

授業を展開するにあたって，次のような授業仮説を設定した。

集団活動の中で児童一人ひとりが自分の好きな楽器を個別に演奏する場を設定すれば，自分や友だちの出した楽器の音を意識して表現に取り組むようになるであろう。

児童が教材曲に出会い，集団の関わりの中で表現していくまでには，本題材の活動では次のような内容と指導者の支援が考えられる。

児童の活動	指導者の支援
①教材曲を知る。	・教材曲「みんないっしょに」はどのような音楽で，どのような活動をするのかを知らせるために，複数の指導者がたいこ，シンバル，リードホーン，トーンチャイム，タンブリンを分担して演奏する。
②好きな楽器を演奏する。	・５つの楽器の中から児童が自分の好きな楽器（音色の好み，演奏のしやすさなど）を選択できるよう，どの楽器も演奏できる場を設定する。
③分担奏の構成を知る。	・５つの楽器が順番に演奏していくことを知らせるために４名の指導者が示範する。その後，指導者と児童が交代して演奏できる場を設定する。 ・分担の箇所を知らせるために，楽器の名称が歌詞に出てきた時に楽器を児童の前に提示する。
④友だちと一緒に分担奏する。	・分担の箇所を知らせるために，楽器の名称が歌詞に出てきた時に楽器を示す。 ・分担奏の順番が分かり，友だちの音を聞いて演奏できるよう楽器を演奏の順番に配置する。 ・音楽全体の構成を身体で表現できるよう，指揮をする活動を取り入れる。

学習を展開するにあたっては，児童の目標行動を設定し，それに対する指導者の支援を考えていった。

児　童	目標行動	支　援
①	指導者の言葉かけによって音楽の流れに合わせて楽器を演奏し続けることができる。	児童の好きな感触の楽器を準備する音を出す際に打つ箇所を示す。
①②⑭⑮	音楽の拍の流れにのったリズムがうてる。	模倣しやすいように指導者が示範する場面を設ける。
④⑤⑥⑦⑨⑪	音楽の拍の流れにのって友だちと一緒に表現できる。	合奏の場面では，出てくる楽器の順に席を配置する。
⑧⑩⑫⑬⑯⑰⑱	友だちの音を意識しながら，分担奏ができる。	伴奏と友だちの音を聞きながら合奏する場面を設定する。

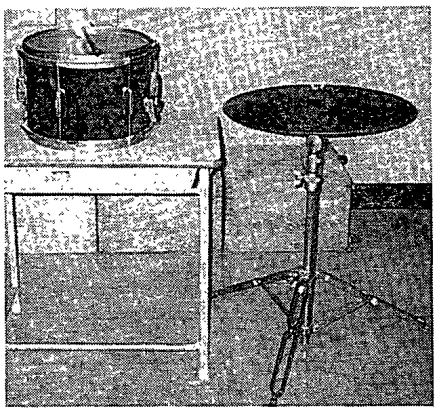


写真１　たいこ・シンバル

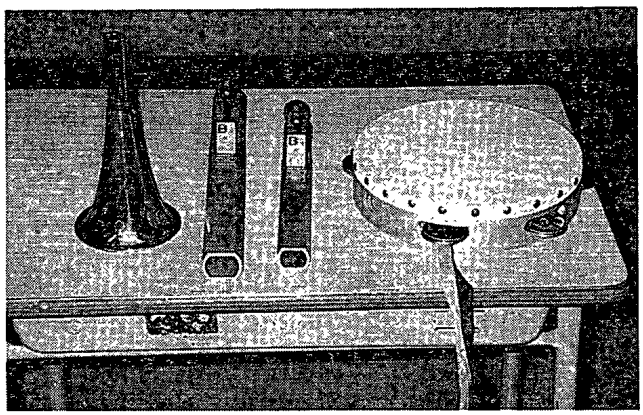
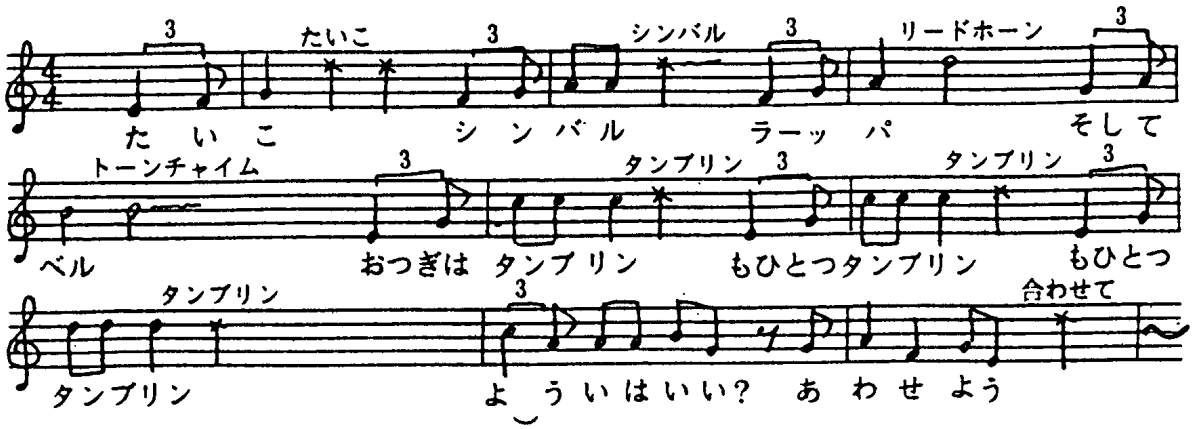


写真２　リードホーン・トーンチャイム・タンブリン

<u>諸例１．「みんないっしょに」</u>



学習過程	予想される活動	指導・支援活動	
		全体	個別
1 始まりの挨拶をする あいさつ／おはようの歌		1　学習の始まりとして毎時間位置づける。	1　本日の当番児童が前へ出て号令をかけるように言葉かけをする
2 既習曲を歌う 今月の歌／リクエスト	・児⑪⑫⑬は，歌いたい歌をリクエストしてくるであろう。	2　児童のリクエストは，できるだけ取り上げて歌うようにする。	2　児①②③が活動に入りやすいよう，指導者が側にいて言葉かけをしたり，一緒に身体を動かしたりする。
3 音楽に合わせて楽器を演奏する 「○○ちゃんでておいで」／「みんないっしょに」 一人で／友だちと たいこ／シンバル／ラッパ／ベル／タンブリン	・歌で呼び出されても，前に出てきにくいと思われる児童（①②③⑮） ・特にシンバルを好むであろう。（⑦⑧⑪） ・「みんな…」では，指揮をするであろう（⑫⑬⑰） ・演奏をしたり，聴いたりしながら，友だちの演奏する順番を示したり，言ったりするであろう（⑩⑫⑬⑯⑰）	3◎児童一人ひとりが好きな楽器を選べるよう，複数の楽器を提示する。 ◎音楽の拍の流れ，速度，強弱は，児童の活動の速度や強弱などによって決定する。 ・「○○ちゃん…」は，児童同士がタッチをして交代していくようにする。 ・「みんな…」では，歌の歌詞に出てくる順に楽器を配置する。 4「さようならの歌」にはリゾネーターベル，チャイムバーを合わせていく。	3　児③が前の方に出てこない場合には，楽器を児童の方へ持っていくようにする。 ・児①②⑮は指導者が言葉かけをして一緒に楽器のところへいくようにする。 ・児④⑥⑧⑫⑬⑯⑰⑱は，自分で交代する相手の名前を歌って代わるように設定する。 ・児⑫⑬⑰が指揮をしやすいように指揮棒を準備する。 ・「みんな…」では児①②③には，指導者が児童の好きな楽器を音楽の流れに応じて提示していくようにする
4 終わりの挨拶をする 歌／あいさつ	・児⑦は，リズムに合わせて指導者にはたらきかけてくるであろう。		

3　考察

児童が見通しをもって表現に取り組むことのできる教師の支援であったかどうか次の４つの点から考察を行う。

(1)　児童の気づきを促す教材教具であったか

児童の楽器に対する興味は多様で，「やってみたい」と意欲を示す楽器は，音質の好みだけでなく，その楽器をどのようにしたら音が出せるか（ばちを使って打つ，手で打つ，吹く，振る）の好み，音が出たときの感触の好みといったことによるものもある。そこで本題材では，たいこ，シンバル，リードホーン，トーンチャイム，タンブリンといった５つの楽器を使用する活動

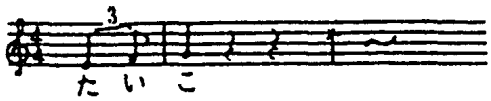
を行った。

これまでの楽器を使用した経験をもとに，たいこ，シンバルを選択すると表現しやすい児童（児童⑦，①，⑬），リードホーンを選択すると表現しやすい児童（児童⑮）がすすんで表現に取り組むことができた。また，５つの楽器を扱う中で，自分の好む楽器がはっきりしてきた児童（児童①，②，③）が見られた。さらに，１つの楽器からいろいろな音色を出そうと，タンブリンを打ったり振ったり，リードホーンの吹き方を変えたりして自分なりの工夫をしていった児童（児童⑧，⑫，⑰）も見られた。これは，本題材で選択した教材曲「みんないっしょに」の活動が児童の楽器に対する多様な興味を引き出すものであったことによると思われる。

(2)　音楽が児童の活動に合わせていくことのできるものであったか

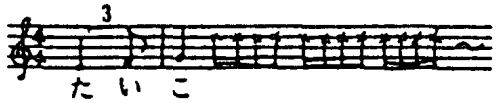
本題材では，５つの楽器を順番に分担して演奏していく活動を行った。児童の表現は譜例２・３・４に示すようなものが見られた。

譜例２



譜例３

譜例４



譜例２は，「たいこ」という歌の後，短発的に１つ楽器の音を鳴らすもの，譜例３は，「たいこ」と歌ったリズムを模して打つもの，譜例４は，「たいこ」という歌の時から連打するものである。教材曲「みんないっしょに」では，これらの児童の表現に音楽が合わせていく（伴奏を児童個々の速さ，音を出すタイミングに合わせていく）ことによって活動が成立するものである。児童個々の楽器への取り組みが受け入れられる教材であると言える。

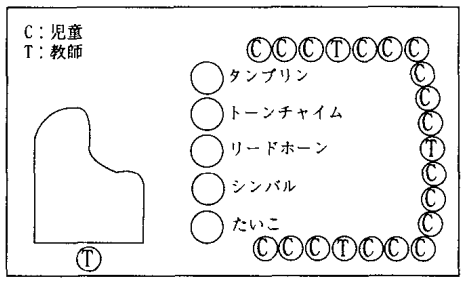
しかし一方では，楽器を演奏する箇所が分担奏という形で限られていたため，楽器興味を示し始めている児童（児童①，②，③）や，個人で演奏することに関心のある児童（児童⑭，⑮）にとっては，十分に表現のできるものとはなり得なかったと思われる。本題材で扱う以外に，例えば，「○○ちゃでておいで」[注2)]（レヴィン作詞作曲・木村訳詞）「さあ，たたこう」[注3)]（レヴィン作詞作曲・木村訳詞）など，個別に十分表現できる教材も必要であると考えられる。

(3) 模倣して活動できる場を設定できたか

教材曲「みんないっしょに」の活動の内容を知らせるために，教師による示範演奏を活動の始まりに行った。音を聞くことによって，児童④，⑤，⑥，③，⑨，⑩，⑫，⑬，⑯，⑰，⑱は活動の内容を把握して分担奏をすることができた。また，児童が順番にみんなの前に出て表現することによって，表現を聞いている児童にもより活動の仕方が分かりやすくなったと思われる。

さらに，教師が１つの楽器から多様な表現をすることによって，教師の模倣をしてリズムを変化させたり，楽器の奏法を変えて音色を変化させたりした児童（児童④，⑩，⑬，⑰）も見られた。これは，教師の示範が活動の仕方を知らせるたげでなく，児童の表現を広げていくために重要な役割をもっている言える。

(4) 相互に聞きあったり，かかわりながら表現することができたか



本題材の活動は，５つの楽器を５名の児童が順番に分担して演奏することによって行った。教材曲の歌の中で楽器が出てくる順に楽器の配置をして，それぞれの児童が自分の前に演奏する友だちが誰であるかわかりやすいようにした。（図１参照）児童⑩が自分より前に演奏する児童⑮の分担の箇所で演奏するように援助したり，児童④，③，⑫，⑬，⑯，⑰，⑱が指揮によって友だちが演奏する箇所を示していくなどが見られた。これは，教師の示範や友だちの演奏を聞いたり見たりすることによって分担奏の意味が分かりやすかったためであると思われる。

また，本題材では分担奏を行うことによって児童相互のかかわりの場を設定した。ここでは，楽器を演奏することによるかかわりだけでなく，演奏を聞きながら指揮をしたり，演奏のようすを身体表現する児童も見られた。この教材曲の構成（１つずつの楽器の音色から広がり，５つの音色を合わせて終わるといった展開）によって設定される場が，児童それぞれが自分なりの活動を広げていくことを可能にしたと思われる。

注１）　C.ROBBINS, P.NORDOFF:Children's Play Songs V- “We'll Make Music Together ”, THEODORE PRESSER COMPANY, 1980

注２）　GAIL M.LEVIN, HERVERT D.LEVIN,NANCY D.SAFER: Learning through Music, TEACHING RESOURCE COMPANY, 1975

注３）　同上

（木村　敦子）